

●桜谷先生を迎えてヤマトサンショウウオの生育地調査

3月18・19日 午前9:30から16:30まで。初日の18日は午前中雨天だとのことで、里山の会事務所で桜谷先生を囲んで本日の計画を練ったり、ヤマトサンショウウオの生態を学習したりしました。木津川市の鹿背山でヤマトサンショウウオの保全管理されている塗信さんや加藤さん、里山の会から大村理事長や播川、金田、野村、太田、山村が加わって情報交換をしました後、11時過ぎから里山農園と生育池の現地を訪ねました。

ヤマトサンショウウオの生育池付近調査では雨の後だったので十分水が溜まっていて良い条件で、10対の卵囊も確認できました。

次に2007年に卵囊が初めて発見された場所を訪ねてみると、十分に奥の方にまで進むことはできませんでした。ここでは比較的綺麗な清水が流れており、生育の可能性があるのではと判断しました。その後、里山農園のエノキ林を念入りに調べましたが、この日の目的でしたハマダラハルカやオオムラサキの幼虫は見つけられませんでした。

木津川河川敷調査、木津川河川敷に巨大なエノキ群落発見

その後、精華町の菱田地区の木津川に移動してエノキ周囲の調査をしました。ここは、山並みが木津川近くまで迫っていて、オオムラサキ生育の条件が良いのではないかと調査しましたが、やはりオオムラサキなどの幼虫は見つけることはできませんでした。しかしここに生育しているエノキは、直径1m以上もあるものが数十本洪水にも負けず生育しているのを発見しました。

今日この頃、山でエノキを見つけることは難しくなっていて、これだけ多くの群落のエノキが大木で生育しているところは非常に珍しく、エノキの葉を食草にしているオオムラサキ、テングチョウ、ゴマダラチョウ、ヒオドシチョウ、タマムシの生育木として大事なのではないのでしょうか。度重なる洪水の中でも生き残ってきた直径1m以上のものが存在する非常に貴重な河川敷となっています。河川敷内の樹木が川に好ましくないとのことで無造作に伐採されてきていますが、木曽川では生物多様性の上から、エノキの群落を伐採しないようにしているそうです。木津川でもこのエノキの群落を守っていく必要があるのではないのでしょうか。



写真の説明 上から

大きなエノキの根本を調査。エノキの群落2枚。崖に掘られたカワセミの巣穴（たくさんあったうちのひとつ）

●桜谷先生からしおりとカルタが寄せられました

ウクライナの国旗をあしらった戦争はだめだという「しおり」と、愛知県立木曾川高等学校の生徒が作った「イタセンパラカルタ」が寄せられました。

ご希望の方にご配布させていただきます。自然を心からいとおしく大切にしたいとの思いから、今起きている戦争は一日も早く集結するよう小さな動きですが、このしおりを多くの方々に活用していただきたいと思います。

●2023年の親子花見乗船体験の参加申し込み

桜満開のたよりも届き始めています。京田辺市の馬坂川の桜も来週には満開になると思われます。今年の親子花見乗船体験、3月22日現在の参加申し込みは約10組です。先着200名の募集ですので、まだまだ余裕がありますので大いに申し込んでください。ご参加をお待ちしています。詳細はホームページからのリンクをご覧ください。

それに先立ち、3月25日にボート乗り場の設置と、馬坂川の清掃を9時半から行います。府宮田辺団地、第3集会所近くにお集まりください。

●2022年度第3回理事会を開催します

3月24日（金）に開催しますので、理事各位はご出席をお願いいたします。場所は、里山の会事務所で時間は13:00から16:00までです。議題は2022年の活動報告、概略決算報告、2023年度活動方針、予算案、2023年度理事候補の選出です。「自然を大切に作る仲間の輪を大きくする」のスローガンを実現していく仲間と、その活動家を強く求めています。みんなで考え、知恵を出しあって進んでいこうではありませんか。年度総会は4月末に予定していますのでご検討をお願いします。

●事務所プレハブ倉庫の整理

昨年道路の拡幅のため事務所がプレハブの移転することになって、資料などもプレハブの倉庫に移しました。十分な整理ができていないため不自由をしてきましたが、先日倉庫内の整理整頓を行っていただき、必要なものを見つけ出しやすくなりました。次の事務所移転の場合に備えて準備が整ったわけです。まったく手も足も出せなかったところを、前理事長の深田さんが大奮闘してくださったことがきっかけとなりました。大変ありがとうございました。

●小川芳也さんの松江通信 No.24

宍道湖東部に位置する松江城や松江城下町は、堀尾吉晴によって1607年から1611年にかけて整備された地形が原型となっていますので、斐伊川が東流する1630年代以前ということになります。宍道湖は、日本海と中海・大橋川と繋がった奥まった湖で水位変化の主たる要因は日本海の潮位変化だった筈ですから、斐伊川東流は大きなインパクトだったことでしょう。また、城下町整備にあたっては掘削した土で沼沢地を埋め立てたとされており、斐伊川と宍道湖が繋がるということは恐らく想定していなかったと思われます。そのため、宍道湖や大橋川の水面と比較して埋立地はそれほど高くはなかったでしょうから、宍道湖東北岸と大橋川左岸に接している城下町は水害に対して万全では無かったと推察します。斐伊川誌を詳細に考察した訳ではありませんが、江戸時代（1603年から1868年の265年間）の中で245年間（1621年から1866年）の間に62回と約4年に1度の洪水が記録されていて、大矢幸雄の報告（斐伊川治水の歴史と水郷松江：水利科学、2010）でも「低平な砂州上に建つ城下町松江はその後頻りに水害を被ることとなった。」と記述していることから水害は大きな問題だったようです。この続きは次回に…